中世・近世の歌人

和歌文学講座 7

和歌文学講座　第７巻

昭和四十五年七月　十　日　初版印刷
昭和四十五年七月　十五　日　初版発行
定価　一八〇〇円

編　者　和歌文学会
会長　久松潜一
発行者　及川篤二
印刷所　暁印刷株式会社

101 東京都千代田区猿楽町二ノ八ノ十三
桜楓社
TEL(二九一)五六六〇―二
振替東京　一八〇二〇

検印省略

中世・近世の歌人　目次

西　行……窪田章一郎……二
一　生　涯……二
二　歌人としての出発……一四
三　旅と歌……二一
初度の陸奥の旅　22　四国の旅　25　再度の陸奥の旅　30
藤原俊成……田中　裕……三四
一　判詞における幽玄……三四
二　歌論における幽玄……四三
三　歌風と幽玄……四九
藤原定家……田尻嘉信……五七
一　はしがき……五七
二　定家の生涯……五九
三　定家の歌風……七二
四　定家の歌論……八五
藤原家隆……有吉　保……九六
一　生涯歴伝……九六
二　歌人活動・歌風……九八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

千載集時代までの活動　98　新古今集時代1　101　新古今集時代2　103　新古今集時代3　107　建暦・建保期　110　承久年間　113　貞応・元仁年間　114　嘉禄・安貞年間　114　寛喜・貞永・天福・文暦・嘉禎年間　115　家隆歌風評　118

式子内親王……本位田重美…一三

一　御生涯……一三

二　『式子内親王御集』……一五

三　式子内親王と定家……二八

四　式子内親王の百首……三三

五　御歌風……三七

源実朝……鎌田五郎…一四一

一　実朝の生涯……一四一

二　歌論史上の実朝……一四四

三　実朝の歌境……一四七

広範な本歌取の歌境　147　王朝風と万葉調との並立　148

四　実朝の作風(一)……一五一

実朝の王朝風　151　実朝王朝風の特色　152

五　実朝の作風(二)……一五五

六　『金槐和歌集』……一六三

俊成卿女……森本元子…一六八

一　はしがき……一六八
二　「三位入道のむすめ」……一七〇
三　習作時代……一七三
四　源通具の妻……一七四
五　「依二歌芸一自レ院有レ召レ之」……一七六
六　「千五百番百首」の世界……一七九
七　俊成逝く……一八〇
八　「そむく道にもなほ頼むかな」……一八二
九　「道ある御代」への悲願……一八四
一〇　嵯峨隠栖と家集自撰……一八六
一一　越部の晩年……一八九

永福門院……次田香澄…一九二

一　作者……一九二
二　作品……一九五
三　作風の形成……二〇一

四　恋愛観照歌……二〇五
五　自然観照歌……二一〇
六　作品の時代と環境……二一二

藤原為兼……篠　弘……二一八
一　持明院統の実力者……二一八
二　二条家との対立……二二〇
三　伏見院の寵遇……二二一
四　『玉葉集』の撰進……二二二
五　京極派の成立……二二六
六　「仙洞五十番歌合」の問題点……二二九
七　玉葉の京極歌風……二三一
八　為兼の作品の特質……二三四
九　『為兼卿和歌抄』……二三七

宗良親王……井上宗雄……二四〇
一　少・青年期（建武まで）……二四〇
二　転戦時代（正平前期まで）……二四二
三　壮年期（正平後期）……二四五
四　『李花集』……二四七

五　「天授千首」……二五〇
六　『新葉和歌集』……二五三
七　最晩年……二五四
八　歌風……二五六
九　影響……二五八

正徹……三浦三夫……二六一
一　出自……二六一
二　出家……二六三
三　居処……二六六
四　正徹謫居説……二六八
五　『なぐさめ草』……二七一
六　定家崇拝……二七四
七　『正徹物語』……二七七
八　『新続古今集』と冷泉派……二八〇
九　『草根集』……二八一
一〇　正徹門流……二八三
二　著作……二八三

小沢蘆庵……香川景松……二八六
一　蘆庵の伝記……二八六

二　蘆庵とその周辺……二九〇
三　蘆庵の作品……二九四
四　歌　論……三〇〇

良　寛……久松潜一……三〇六
一　良寛の人間性……三〇六
二　良寛の歌風……三一〇
三　良寛の和歌と漢詩と書……三一六

香川景樹……實方清……三二

引用歌索引……三四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

中世・近世の歌人

西　行

窪田章一郎

一　生　涯

西行は崇徳天皇の保延六年（一一四〇）一〇月一五日、二三歳で出家したので、逆算して鳥羽天皇の元永元年（一一一八）に生れたことが知られ、後鳥羽天皇の文治六年二月一六日、河内国石川郡の弘川寺で没したとき、七三歳であったことが知られる。生涯を決定した出家の時期については、藤原頼長の日記『台記』の康治元年（一一四二）三月一五日の一節に貴重な記事がある。

西行法師来云、依レ行二一品経一、両院以下貴所、皆下給也、不レ嫌二料紙美悪一、只可レ用二自筆一、余不レ軽二承諾一、又問レ年、答曰二十五、（去々年出家二十三）抑西行本、兵衛尉義清也、（左衛門大夫康清子）以二重代勇士一、仕二法皇一、自二俗時一入二心於仏道一、家富年若心無レ欲、遂以遁レ世、人歎二美之一也。

また、『尊卑分脈』の注記には、

歌人、鳥羽院下北面、左兵衛尉、母同二仲清一、依二道心一、俄発心、出家、所々経行、法名円位、号二大宝房一、又号二西行一。

とあり、『百錬抄』には、保延六年一〇月一五日の条に、

佐藤右兵衛尉憲清出家 年二十三、号西行法師

とある。出家については『台記』に「若心無欲、遂以遁世」とあるのが妥当と認められ、『尊卑分脈』に「俄発心、出家」とあるのは、西行説話にむすびつくようである。出家を思う心は当時の青年に一般的なもので、藤原俊成などにも見られるが、それを実行したか、しなかったかに相違があり、その点で「人歎美之」ということになったのであろう。出家という行為は、生活様式を変えただけではなく、歌人としての生涯を変え、重大な意味をもつものであったが、これは西行の生得の資質によるものであった。性格、性情は運命というべきものであり、それにしたがって没年にいたるまでの五〇年の生涯が決定されたと考えることができる。この意味で出家は人生行路のうえでの一つの大きな事件であった。また、出家ということが、それ以後の歌人としての活動に大きく働いてゆくようになった。この小文も、この視点に立って考えてみようと思う。

西行の家系については、『台記』に「重代勇士」と記されているように、代々、武をもって立つ家であった。藤原氏の流れで、右大臣魚名の五男、伊勢守藤成から四代目の秀郷を祖としている。武蔵守、鎮守府将軍となり、俵藤太と呼ばれて武勇のほまれは東国にひびきわたっていた。その子千時の子孫は奥州平泉の藤原氏で、西行が訪れている秀衡は、秀郷から九代目であり、西行の没後まもなく源頼朝に滅ぼされたが、二回にわたる西行の陸奥の旅はこの同族があったからである。

千時の弟千常もまた鎮守府将軍となっているが、この子孫は多くの家々にわかれている。秀郷の七代の孫公清は検非違使、左衛門尉で、佐藤氏を称するようになり、秀清、康清とつづいて、佐藤氏としては四代目、秀郷からは十代目に仲清・義清の兄弟が生れている。佐藤氏は都で生活し、代々そうであったように義清もまた出家するまでは、おなじく左兵衛尉で、鳥羽院に奉仕する下北面の武士であった。

系図をたどると、秀郷にはじまる西行の同族は全国各地に根拠地をもつことが知られ、摂関時代から院政時代へとくだるにつれて哀運をたどる豪族ではあっても、佐藤氏は『台記』に「家富」といわれるだけの経済力はまだ持ちつづけていたし、同族を全体として視野に入れるときは、平泉の藤原氏をも加えて富裕であった。「重代勇士」というのも、佐藤氏を称する以前までさかのぼり、また同族をも考慮に入れると、誇りをもつ武士の家系であった。

西行は出家してから保元、平治・治承・寿永の戦乱をその目に見た。古代の豪族である同族が、中世へと推移する大きな変革期に生きるきびしい歴史のすがたを見たのである。西行が現実を踏まえ、批評的に自己を見、社会をも見、さらに自然をも見ることのできた視野のひろさは、同族のたどった歴史と、出家生活とに根拠をもっていたと考えていいであろう。

西行は平清盛とおなじ年に生れ、清盛の没したとき六四歳であった。その後、清盛より一〇年長生きをしたが、この期間に平氏滅亡、源氏制覇、平泉の藤原氏滅亡を見ている。その生涯は古代末期、中世初頭の歴史的緊張の中に生きたことになるが、その行動と体験とは歴史の主流から遊離していなかったのは、歌人としては稀な存在であった。晩年になっても作歌力が衰えず、私見によれば晩年に及んで円熟し、清新味を発揮している大きな理由は、歴史の現実に押し流されず、ひらかれた目をもって対処することのできた人間であったからであろうと思われる。人間尊重の詠歎が狭い境地に閉ざされることなく、健かな力強さ、ゆたかさ、ひろさをもって、われわれに響いて来る秘密は、与えられていた天分は別として、意志的な生き方と歌に対する態度とに根ざしていたと考えられる。

二　歌人としての出発

二六歳で出家したときの義清が仏道に心を深く寄せていたことは言うまでもないが、それと同等に歌にも心を寄せていて、この二つの道に生きる覚悟を決めていた。

在俗時代の義清は一六歳ころ徳大寺家の随身となっており、一九歳までのうちに鳥羽院の下北面の武士となっていたことが推定される。父祖代々のコースを踏んでいるのであるが、出家前の数年間に精進した兵法、射御の武士としての道には、自信をもつ域に達していたようである。晩年、陸奥への旅の途中、鎌倉で頼朝と会談した『吾妻鏡』の記事（文治二年一一月一五日）によると、長時間にわたって「弓馬事」に関する話をしている。西行としては遠い昔の若いころの知識であるが、よほどの自信をもっていなくては話題にすることが不可能であったろう。

また、在俗中、当時の貴族社会ではすべての者が身につけていた蹴鞠の技にも、とりわけ才能を認められていたことが、『蹴鞠口伝集』によって明らかにされている。才能を発揮するためには、いかに熱心であったかということが前提となる。義清時代について知られることの少い中で、この二つは貴重な資料となる。在俗中の西行が芸道に寄せた熱心の程度を想像することができるからである。

この二つの道は出家後、不要のものとして捨てられたわけであるが、そこに示された才能と、才能を生かした熱意とは、西行の生得の資質として、失われることなく持ち続けられたものであったのを疑うことはできない。短い期間ではあったが、打ち込んだ二つの道は、その領域で注目されるだけの境に到達したのであるが、出家後はみずから選んだ仏道と歌道との二つに、そのすべてを傾けたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com